んでくれたんだ。」（J男）「すごい数だよ。計算しなきゃあ。」（K男）などと語り合っていた。翌日、卵の合計数を計算することに決まり、筆算を何度も繰り返して月ごとの合計数を出し、さらにそれを足していった。どの子も夢中で計算――全員が同じ2960個になり、決定した時は拍手が起きた。「むずかしかったね。かけ算覚えといてよかったよ。」とA子がいうと、M子も「うん、きっとまだ足してるね。」と笑った。そして、いよいよこのグラフから分かったことをまとめた。（卵の数は今年度総数3033個になった）

- うずらさんは、春から夏にたくさん卵をうむ。
- だいたい最低気温が20℃くらいの時が多い。
- 夏の一番暑いときは、卵をうむのが減る。
- 秋になって、最低気温が13℃くらいで産むのをやめる。

ここまで意見が出された後、しばらく考えていたJ男が「分かった！うずらさんは、ひなを育てやすい季節に卵を産むんだね。」と大きな声で言った。続いて、Y子が「人間のために産むんじゃあないんだよね。」と言った。どの子どもも「うん、そうだよね。」と大きくうなずいた。

二年間の記録をただの数字的な記録に終わらせることなく、自分たちの活動のまとめとして作品作りをし、その中で「卵を産むのは人間のためではない」という結論を出したことも大きな成果であり、生きた学びと言えよう。それはこの記録やグラフがただの数字ではなく、いかに子どもたちの生活に根ざしたものであるかを表しているのではないだろうか。一日も欠かすことのない気温や卵の表やグラフの記録は、春組の子どもたちの共有の財産となった。

五、おわりに

総合学習における材との関わりや必要感から学習が成立する時、子どもたちは実に意欲的に追究し、自らの力で課題に迫ろうとしていく。春組の教室には、うずら飼育に関わる様々な掲示物が所狭しと貼られ、そこに記された数や言葉、絵図は、子どもたちにとって必要感に裏打ちされた実感そのものであったと思う。まさに生活の中に総合があり、生活の中に数の学習が展開していたということができるのではないだろうか。本校が目指す「内から育つ」子どもたちの学びの姿であったと思う。

そしてそうした学び方を積み重ねた子どもたちは、例え総合と直結する学習場面でなくても、自ら考え工夫し、自分自身が納得できる追究をしていくことができるようになるのだと思うのである。

続いて六年勇組「伊那小の桜を守ろう」の実践から「桜守の活動を通して、季節や自然・命に寄せる思いを豊かに表現

していく子どもたち」について紹介しようと思うが、誌面が尽きてしまった。各校に配布されている長野県教育委員会発行の『「確かな学力」向上のための教育課程づくり』（第二集）をご覧いただければ幸いです。

（伊那小）

学力向上に向けて

～学力基盤の崩れをどうたてなおすか～

原　一　宏

はじめに

「学力」のとらえとして、文部科学省では「生きる力」（知識・技能のみではなく、関心・意欲・態度を含む）としています「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」。また、佐藤学先生（東京大学大学院教授）は「学力」の意味が拡張したり、混乱しているので「achievement」の翻訳語だから、「学校で教える内容」についての「学びによる到達」という意味だけしか持っていないとしています。他に、「目に見える学力」「見えない学力」と分けられる方もいるようです。ここでは文部科学省の「学力」の定義に沿いたいと思います。

学力に関しては二〇〇三年にOECD（注1）が行っている生徒の学習到達度調査（PISA）（注2）によって、いっそう「学力低下」問題がクローズアップされ、「基礎・基本の定着」がより強調され、「学習指導要領の改訂」作業材料になったことは承知の通りだと思います。

この調査で注目を浴びたのが、フィンランドです。読解力（注3）及び科学的リテラシー（注4）一位、数学的リテラシー（注5）二位、問題解決能力（注6）三位といずれも好成績を収めたのです（二〇〇三年）。各「リテラシー」におけるフィンランドの子ども達の水準の高さを示しましたが、一方で子どもの学校嫌い、怠学傾向という教育が抱える問題も明らかにしました。日本・韓国・オランダもフィンランドと同様であり、いずれも数学的リテラシーランキング上位国であったといいます。皮肉にも「子どもの学力を上げたければ、子どもを学校嫌いにすればよい」という皮肉な言い方もされています。（「フィンランドに学ぶ　教育と学力」二〇〇五年十二月庄井良信　中嶋　博　編著　明石書店）

このようなことを考えたときに、テストの点が高い子が必ずしも関心意欲が高いわけではないということになります。関心意欲を高め、勉強好きな子、学校好きな子にしていくためにはどうしたらよいのか…さらに課題は残りますが、信濃教育会前牛越充会長が「学力の向上をめざす　授業改善」

（二〇〇五年十一月　信濃教育会出版部）の冒頭でも述べているように「学力向上の基盤にあるもの」が崩れてきているので「学習意欲の低下」が起こっていると思われます。

学力が本当に落ちているか定かではありません。いつも出てくるデータはやはり断片的なものが多く、確かに学力が落ちているのだと明確に断定できないのです。

学校五日制・授業内容の三割カット・選択科目中心の教育課程・受験科目の削減……いろいろな要素が入ってきているので明確に言えない部分もあると思います。その辺は専門家にゆだねることとして、ここでは「学力基盤の崩れ」をもう一度再構築して行くにはどうすればよいかを考えたいと思います。

その基盤に当たるものを、私は次の五つにしぼりました。

(一)　教師力と同僚性
(二)　「聴く」こと（呼応の世界）
(三)　対人関係能力（コミュニケーション能力）
　　○ふれあい・共感の世界・認め合う・支え合う
(四)　しつけとルールの定着
(五)　生活のリズム

(一)　教師力と同僚性

教師自身も子どもと共に自分を伸ばしていかねばならない（教師力）職業です。そのためには、教師が元気で自分らしさを職場で発揮することだと思います。そして、職場の中でよりよい教師集団を作ることです（同僚性）。よりよい教師集団とは、たんに仲良しグループではありません。世間話をしてはしゃいでいるような集団でもありません。切磋琢磨してお互いを磨きあえる組織集団です。同じ釜の飯を食べる集団です。まさに、学校長を中心とした「運命共同体」なのです。

最近聞いた話ですが、「職員研修旅行が成立しない学校」が増えてきたと言います。旅行に参加する人が少なくて、旅行自体が成り立たないというわけです。いろいろな事情があり、それだけで語るわけにはいきませんが、教師集団の人間関係が少しずつ希薄になってきていることを物語っているのかも知れません。こういう中で危惧するのは同僚性の低下です。それに拍車をかけつつあるのが「教員評価」やトップダウン方式の教育改革です。せめて長野県だけはそうなってほしくないと思っています。この「同僚性」は日本の教師が誇るべき、お金をかけず教師相互が学び合える貴重な財産・資源です。

めまぐるしい教育改革に対抗していくためには、厳しい環境の中で、「自分の職業に自信を持てるようにしていくこと」

ですね。そして、「自分の信ずる道をマイペストで歩く事」しかできません。教師は将来を担う子ども達の人格形成に携わるすばらしい職業だと信じます。だからあえて私は「聖職」だと思っています。最近、新田次郎の「聖職の碑（いしぶみ）」を改めて読み、教師とは何なのか、教師の使命とは何なのか……色々考えさせられました。もう一度私たち教師が原点に立ち返る必要性も感じました。映画の中にも「教師にとって子ども達は命」こんな台詞（せりふ）もありました。そんな風に思える教師は本物だと思っています。教師として自信を失っている先生方が多いと聞きます。実は私も何度も挫折しそうになったことがあります。「教師やめたい」と思ったことは数え切れないほどです。最近は学校に対して理不尽な要求を突きつけてくる保護者「モンスターペアレント」なる言葉も広まってきています。また、いじめ、不登校、軽度発達障害など子ども達の対応も多様になってきています。そんなとき支え合えるのは、同僚の教師集団です。まさに同僚性ですね。私は、将来的には先生方を元気づけられるような活動をしていきたいなあと思っています。こんな事をいきがって書いていても、後でまた、「ああ教師やめたいな」と思う時が来るかも知れません。その時はもう一度原点に立ち返ってみたいと思っています。

現場で悪戦苦闘している先生たち！どうぞ地道な実践をされ、自分らしい味のある授業を、そして目の前にいる無限の可能性を持った子ども達を心からいとおしみ、愛してください。子ども達は素直に今の社会を表現しているに過ぎません。子ども達に責任はないのです。どうぞ、自信を持って明るく子ども達と接してください。優しい愛の言葉で接してください。目の前にいる子ども達の気持ちをわかってあげてください。ともに愚直に生きていきましょう。ただ子ども達のためにです。先生たち、共に励みましょうね。（いつも心の中で描いている仲間の先生達への応援歌です。）

(二)　「聴く」こと　（呼応の世界）

私は「話す」ということより「聴く」ということを小学校の段階では身につけさせておくべきだと考えます。しかも、小学校低学年からが大事だと思います。人の話を聴くと言うことはどういう事かを考えさせたり、教えてあげることはとても大切なことです。具体的には次のようなことになると思います。これはどの先生も実際にやっていらっしゃることだとは思いますが、今や小学生どころか大学生まで一貫して教えるべき大事な事柄だと思っています。具体的には次のようです。

聴くこと　……小学校の例

○話し手の目を見て
○反応しながら（頷く・つぶやく・応答する）
○心を働かせて（関心を持って・プラスに受け止めて）

子ども達が無我夢中になって熱中している時の姿勢を思い起こされると良いかも知れません。体は前の方に少しのめり込むように出し、目は一点を見つめて、頭はじっとしていて動かない。……そんな感じです。能動的に話を聴くということです。

当然、中学・高校・大学それぞれの発達段階で異なってくると思います。大学生でも私語が多いと聞きます。大学生の目の前にいる教官が指導するしかないでしょう。それが教える側学ぶ側の最低のルールであると思っています。講義ではなく、参加型の学習形態を取り入れるなどの工夫が大学教育まで必要な時代になってきています。

私語とは公共性の空間を私的に奪い去っていることです。平たく言えば自分勝手な事です。国会中継などを見ていても、人の話を聞かずヤジを飛ばしている場面があって非常に見苦しいと思います。

もちろん話し手にもそれぞれ工夫は必要でしょう。しかし、少なくとも「教師」の話しを「聴こうとする」ことは授業成立の最低条件であると思っています。

㈢ 対人関係能力（コミュニケーション能力）

○ふれあい・共感の世界・認め合う・支え合う

対人関係能力（コミュニケーション能力）をつけること…対人関係がうまく形成されないために、トラブルが発生しやすく、不適応感とそれに伴う不安・自己肯定感の低下ですね。この問題を現代の子ども達は抱え込んでいる様な気がします。私たちの学年でも例外ではありません。それを解消していくための一つの技法として、今注目されているのが、構成的グループエンカウンター（SGE）です。（注7）ご存じの方が沢山いらっしゃると思います。

ふつうのゲームとは違うので注意が必要です。ゲームはそのゲーム自体を楽しみますが、SGEでは「ふれあい」と「自己・他者の発見」です。また、ある程度集団の中にリレーション（あたたかくて受容的で自由な人間関係）が出来ていないと失敗に終わります。従って、SGEの最初はリレーション形成のためのエクササイズ（参加者の心理面の発達を促す課題）が中心になります。エクササイズの種類は「自己理解」「他者理解」「自己受容」「自己表現・自己主張」「感受性の促進」「信頼体験」の六つです。また、①インストラクション（ねらい、内容、留意点などの説明）②エクササイズ③シェアリング（感じたことや気づいたことを語り合い共有し合う。見方・受け取り方・考え方……認知の拡大・修正がねらい）④介入の四つの原則を元にして進めていきます。SGEの成果としては一般的に次のことが実証されています。

○集団への帰属意識の高まり……居場所づくり
○集団の凝集性の深まり方を変えられる
○集団の規範意識が高まる

学年で取り組んでみたことを少しあげてみます（次ページ参照）。詳しくは図書文化からエクササイズ集など沢山出ているので、活用されると良いと思います。朝の会や帰りの会のショートエクササイズも効果的です。子ども達の声として、
・友だちとふれ合うってこんなに楽しかったんだ・友だちの手の温かさを感じた・私って余り人と話してないな
・とっても楽しかった……という感想が良く聞かれます。それと並行して、子ども達が今の学級集団で満足しているかどうかをQ－Uで見ることも大事ですね。（ここではスペースの関係で詳しく言及しません）

笑顔で挨拶そして、握手「今日も宜しくお願いしますね」

授業の中ではどうでしょうか。先生と子どもとの対話。子ども同士の対話。教え合い、励まし合い。そして支え合いのできる学習を組み入れていく。できない子が出来たときにみんなで「すごい！」と喜び合う……先生も一緒になって子ども達の声に耳を傾け共感する……。学び合いによる協同学習ですね。習熟度別学習や少人数学習よりかなり成果があると確信しています。

㈣ しつけとルールの定着

だいぶ古い話ですが、かつて町田市の忠生中が荒れていた時期があり、その立て直しに力を注いでいた当時の長谷川義縁校長（私の記憶が間違っていないことを祈りますが）は次のようにおっしゃっていました。「学力とはしつけと集中力である」と。しつけは家庭で……。このことが以前から通用

～ふれあい体験をもとにした　集団作りはと　あったらよ　か～

…… 構成的グループエンカウンター

（Structured Group Encounter 略：SGE）の手法を　り入れて ……

1．はじめに

子ども達が変わってきたと言われ続けて久しい。耐性の欠如、友だち関係が希薄、学力低下、意欲低下、規範意識の低下……。人間を取り巻く急激な環境の変化と我々大人の価値観の多様化にもよるだろう。経験則に裏打ちされてきた教師の対応が、通用しなくなってきており、学級崩壊を起こすことも珍しくなくなってきた。また、教員を取り巻く環境も年々厳しくなってきており、集団対応・保護者対応・生徒指導処理……等に教員も疲れ切っている様子がうかがえる。特に、集団を教育集団として機能させていくことは子ども達自身にとっても、学級生活に満足していくことであり、いじめ、不登校の問題も予防できるのではないだろうか。

本校6年生は集団として大変良くまとまっている。男女関係も良好である。昨年のQ－Uでは学級生活満足群は90％を超えている。（昨年12月実施）

しかし、個々に見てみると自分の気持ちを友だちに直接言えなかったり、「○○さんが言っていたよ」と間接的に言ったことが誤解を生むなどして嫌な思いをしている子ども達もいた。友だちを注意することに「注意すると反対に変なこと言われる」と言う理由で消極的になる子もいる。これは自分自身に自信を持てない、まわりの友だちの評価を気にしている、注意の仕方の問題、自分の気持ちを伝える事が不十分等から来ていることにもよるだろう。

友だち同士の関係がしっかり出来ていれば、本音で言うことも出来るし、温かく友だちを支えることも出来ると考える。

温かな人間関係を築き、集団としての機能が最大限に発揮されるために、ふれあいを元にしたSGEの手法を取り入れ、より子ども同士のコミュニケーションを高めたいと願い本テーマを設定した。

2．今まで行ってきた手だて

(1) 構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter 略：SGE）の手法を取り入れる

(2) 対話のある授業……子ども同士で関わる授業の構築
わからない　○○さんの言っていることは……　○○さんと違って

(3) 子どもの反応に対してプラスに受け止め、広げる　教師も共感し広げる
ワンネスの世界　自他一体の世界を作る。

(4) なおそうとせず、わかろうとする教師の姿勢
本年度……Q－U等で成果を実証していく（学級生活満足群100％を目指す）

3．本時　授業内容（特別活動）

ねらい：SGEを体験し、沢山の友だちとふれあい、ふれ合う楽しさや友だちのことを深く知ることが出来る。（また、自分に気づくことが出来る。）

※その時の子ども達の状況により、やらないエクササイズもあります

	エクササイズ	ねらい	介入	準備品	時間
導入	○自由歩行・握手 ○「くまがりにいこうよ」歌 ○ひたすらジャンケン	・顔なじみの友達とできるだけふれあう ・アイスブレーキング 緊張している場合はこれを入れる	・握手するときは相手の目を見させる。 ・予定通り全体が進行しているか	・ストップウォッチ	5分
展開	○あわせアドジャン ○足し算トーク4～5人組	・グループ全員が同じ数を出すために、気持ちを合わせたり、話し合ったりする活動を通じて、自己理解・他者理解を促進し、グループの凝集性を高める。 ・たくさんの友達と広く浅くふれあう　不安解消　関わりを深める・他者の多様な面に気づく ・仲良くなりたい、親しくなりたい気持ちを相手に伝える	・数字のあったグループが出たら、そばに行って大きなリアクションで盛り上げる。 ・のらない子には、先生が誘ってジャンケン ・お互いに肯定的に友達の話が聞けているか観察 ・感じたこと気づいたことを話し合わせる。		30分
	グループシェアリング	・友だちの感じ方や気づきを共有する。	・友だちのことを知ることができたか。感じたり、気づいたりしたことを出させる。 ・発言を促す		
終末	全体シェアリング	・友だちの感じ方や気づきを共有する。	・あわせアドジャン ・足し算トークで感じたこと、気づいたことを出しあう。 ・発言を促す		10分

しなくなってきています。しつけも学校でやらなければいけない。集団の中でルールや人間としてのあり方を教えなくてはなりません。同時に保護者への啓発も忘れてはなりません。教科書に書いて無くても、少なくとも児童生徒の人生の大先輩として胸を張ってしっかり教えたいものだと思います。当たり前のことをです。私は最低次のことは教えます。

○うそをつくな○人をいじめるな○仲間外しにするな○人を馬鹿にするな○ごまかすな○自分の生命（いのち）をこの世に出させてくれた父母を大事にしない者は成功しない○人の話を集中して聴きなさい○言葉遣いに気をつけなさい○自分の生命（いのち）を粗末にするな○物を大事にしなさい。そのことは人を大事にすることにつながる○全てのものには中心がある。学級の中心は先生である。学校の中心は校長先生である。そして、家庭の中心は親である。○いつも「ありがとう」の感謝の気持ちを持っていることが幸せにつながる。全ては自分以外の人や物のおかげで私は生かされている。○人生の目的は人のためにいかに尽くしていくかである。世のため人のために働くことである。そして、自分らしさをこの世の中に出していくことである。そのために今学んでいるのだ。

また、集団で動くときもなぜ今「黙って動かなければならないのか」「なぜこのルールを守らねばいけないのか」を意味づけして話していかねばならないと思います。これは笑い話になるかも知れませんが、ある子が食べながら歩いていました。近くにいたおばあさんが、「食べながら歩いてはいけないよ。座って食べなさい。」と注意しました。「どうして食べながら歩いてはいけないの？」と言って今度は寝そべってものを食べ始めました。唖然とさせられますね。私たち大人がしっかりとモデルになってあげなければなりませんね。子ども達のせいではないことは一目瞭然です。このように今ルールとしつけを子ども達にしっかりと教えてあげなければなりません。出来るだけ小さいうちにです。ですから、小学校低学年の教育はとても大事だと思います。

㈤　生活のリズムをつくる

「早寝早起き朝ごはん」運動が、文部科学省により、平成十八年年四月二十四日から本格的に始まりました。本運動に賛同する百を超える個人や団体（ＰＴＡ、子ども会、青少年団体、スポーツ団体、文化関係団体、読書・食育推進団体、経済界等）など、幅広い関係者が参加し、「早寝早起き朝ごはん」全国協議会が設立されたのです。私はこれに「テレビ・ゲームは一時間以内。家族団らんの時間を確保」を追加

して、家庭へも呼びかけています。「早起きは三文の得」ということわざ通り、一日の疲れの取れた状態での勉強はやはり能率が上がります。そして、何より授業に集中できます。朝ご飯は言うまでもありませんよね。脳の活性化です。食べた子とそうでない子の目つきが違います。食べた子はやはり、集中力があります。テレビ・ゲームは一時間以内。これは見ないに越したことはないのですが、テレビ・ゲームの害はいろいろな本に書かれているとおりです。家族団らんはどうしてもとりたいですよね。コミュニケーションと家族の団結を培うものです。そしてさらにつけ足すならば、「お手伝い」です。机上の勉強も大事だが、体を動かして働くことも勉強だと思います。お手伝いを良くする子は掃除もしっかりできる子が多いですね。便利な世の中になればなるほど、失われるものが沢山ある。人間性もそのひとつである事を忘れてはならないと思います。

私は、「学力を向上させる」のは良いが、学力の基盤がすでに崩れかけていることに警鐘をならしたいのです。そのことは人間性の崩壊が始まっていることにつながっていきますし、社会経済の低迷化を起こす原因にもなっていると思います。

私たち大人が、早くそれに気づき、立て直していかねばなりません。最近「親塾」「親業」「親学」などと「親のあり方」を考えようとする運動が展開されていることはすばらしいことだと思います。目の前に起こっている子ども達の様々な問題は、実は大人自身に突きつけられた問題であり、大人自身が子どもの前で襟を正し、良きモデルを示していかねばならないときに来ているのです。現在の子ども達にモデルがドンドン消えつつあるような気がしてなりません。

子どもと共に教師・保護者・地域が伸びる社会を目指して邁進して参りたいと思っています。

（注１）ＯＥＣＤ経済協力開発機構英：Organization for Economic Cooperation and Development ヨーロッパ、北米等の先進国によって、国際経済全般について協議することを目的とした国際機関）

（注２）（ＰＩＳＡ）（Programme for International Student Assessment, PISA）

〔数学的リテラシーが中心分野。読解力、科学的リテラシーを含む主要三分野に加え、問題解決能力についても調査。四十一か国・地域（ＯＥＣＤ加盟三十か国、非加盟十一か国・地域）から約二十七万六千人の十五歳児が参加（ただし二〇〇三年調査では、イギリスの学校実施率が国際基準を満たし

ていなかったため、分析から除外されている)。なお、二〇〇〇年調査は三十二か国(OECD加盟二十八か国、非加盟四か国)が参加。結果についてはPISA(OECD生徒の学習到達度調査)二〇〇三年調査(文部科学省インターネット)にも掲載されている。)

(注3)「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」:PISA(OECD生徒の学習到達度調査)二〇〇三年調査:文部科学省)

(注4)「自然界及び人間の活動によって起こる自然界の変化について理解し、意思決定するために、科学的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導き出す能力」PISA(OECD生徒の学習到達度調査)二〇〇三年調査:文部科学省

(注5)「数学が世界で果たす役割を見つけ、理解し、現在及び将来の個人の生活、職業生活、友人や家族や親族との社会生活、建設的で関心を持った思慮深い市民としての生活において確実な数学的根拠にもとづき判断を行い、数学に携わる能力」PISA(OECD生徒の学習到達度調査)二〇〇三年調査:文部科学省

(注6)「問題解決の道筋が瞬時には明白でなく、応用可能と思われるリテラシー領域あるいはカリキュラム領域が数学、科学、または読解のうちの単一の領域だけには存在していない、現実の領域横断的な状況に直面した場合に、認知プロセスを用いて、問題に対処し、解決することができる能力」PISA(OECD生徒の学習到達度調査)二〇〇三年調査:文部科学省

(注7)「エンカウンター」という用語は「出会い」という意味。出会いとは縁を大事にした触れあいのことである。ホンネとホンネの交流をするという意味でも使う。このエンカウンターをグループで実現しようとするので「グループ・エンカウンター」という。グループエンカウンターには非構成法と構成法があり、國分康孝が一九七〇年代半ばに我が国に紹介、普及したのが「構成的グループ・エンカウンター」(Structured Group Encounter,以下SGEと略記)である。リーダーが用意したプログラム(エクササイズ)により作業や討議を行うのが特徴である。また、これは開発的なカウンセリングの一技法として人間関係開発やサイコ・エジュケーションの一方法として用いられている。グループエンカウンターは、自分を大事にする人間を育て(自己肯定感の向上)、相手のことを大事にするようなかかわり方を身につける(人間関係づくり)ための技法として、優れたものである。

まとめると、エンカウンターとは、ホンネとホンネの交流や感情交流ができるような密接な人間関係(体験)をいい、そのためにリーダーの指示によって行うエクササイズを通して集団でエンカウンターを体験することをSGEという。

〔参考文献〕
○「教師力」 上 下 河村茂雄 誠信書房 二〇〇三年
○PISA(OECD生徒の学習到達度調査) 文部科学省 二〇〇三年調査
○「フィンランドに学ぶ 教育と学力」庄井良信 中嶋 博 編著 明石書店 二〇〇五年十二月
○「学力の向上をめざす 授業改善」信濃教育会出版部 二〇〇五年十一月
○「構成的グループエンカウンター事典」 國分康孝・國分久子編集 図書文化二〇〇四年十一月
○「学力を問い直す」 佐藤 学 岩波書店 二〇〇五年六月
○「本当の学力をつける本」陰山英男 文藝春秋 二〇〇三年八月

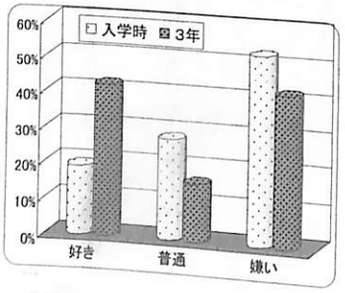
(箕輪中部小)

学力向上への試み「魅力ある授業づくりへの挑戦」

～解けた・できた・分かったとつぶやく生徒～

宮下芳雄

「ここに補助線をひいたら、使いたい三角形がみえてきた、ここととここは同じだから……。」「今までは、全然分からなかったけれど、ちょっと工夫するといがいに簡単に解ける事が分かった。解けるとおもしろい。何か一寸できるようになったみたい。数学の時間が短く感じられてきた。」

これは、『数学なんて大嫌い』といって、授業になかなか取り組もうとしなかったF生のつぶやきである。そこには学び方と学力に支えられた、教科の楽しさを発見しはじめた生徒の姿があった。

私たちは、このように「解けた・できた・分かったとつぶやく生徒」を求め、学ぶ意欲を喚起し学力の定着を図っていきたい。そのことが学力を向上させていく上で、一番の近道ではないかと考え